

Report on the Symposium: Faith and cultural inheritance beyond the crisis (Global Studies Education Project)

KAMATA Toji[†], SUDA Gunji[‡], NARA Kenji[§], KONISHI Kengo^{††}, SAITO Chie^{‡‡}, KUWANO Moe^{§§}

Abstract

This report presents a summary of the discussions of four speakers that participated on the symposium: ‘Crisis and Cultural Transmission’, organised by the Global Studies Education and Research Project, from a variety of perspectives. The symposium included multi-disciplinary discussions on festivals, myths, songs, sacred places and the transmission of Christian beliefs. Toji Kamada (folklore studies and philosophy of religion) discussed traditional cultures such as festivals and songs as a key to turning disaster into well-being. Gunji Suda (photographer, research on megalithic beliefs) discussed belief in megalithic beliefs that transcend ethnicity, nation and culture. Kenji Nara (History of *Kirishitan*) referred to the inheritance of Christian culture in the Kaga clan and the hope for the future found in the *Kirishitan* ideology. Finally, Kengo Konishi (Cultural Anthropology), who studies the survival of communities from the perspective of religious practice, clarified the concept of ‘saïen’, which integrates different people.

Keywords

disaster, crisis, faith and cultural inheritance, resilience

グローバル・スタディーズ教育プロジェクト研究所公開シンポジウム 「危機と文化継承」報告

鎌田 東二[†], 須田 郡司[‡], 奈良 献児[§], 小西 賢吾^{††}, 齋藤 千恵^{‡‡}, 桑野 萌^{§§}

キーワード

災害, 危機, 信仰と文化継承, レジリエンス

[†] t-kamata-ue7@sophia.ac.jp (Professor emeritus, Kyoto University)

[‡] voiceofstone@gmail.com (Artist/Photographer)

[§] izhak.kenji@gmail.com (Gallery justo, Takayama Ukon Memorial Museum)

^{††} konishi.kengo.4z@kyoto-u.ac.jp (Institute for the Future of Human Society, Kyoto University)

^{‡‡} csaito@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

^{§§} mkuwano@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

はじめに：危機と文化継承について

(齋藤千恵)

2022年5月6日にシンポジウム『危機と文化継承』が行われた。このシンポジウムのテーマは、グローバル・スタディーズ教育プロジェクト研究所の研究テーマの一つでもある。2020年4月に発足した本研究所は、21世紀に入り日本社会をはじめとするさまざまな社会が経験してきた特徴的な出来事や社会状況、例えば、人口移動や少子高齢化、更なるグローバル化や紛争及び戦争、伝染病、そして大規模災害において、文化がどのように変化するのか、また、継承されていくのかといったことを研究するために設立された。その研究テーマの一つが「危機と文化」である。

危機、あるいは、危機的な状況は、様々な出来事や原因により引き起こされる人間社会の状況である。社会における特定の原因が特定の状況を作り出す。ベン・ワイズナーらは、自然災害は、自然のハザードと人間の行為の複合的な結合により生じるものであるとした。つまり、大津波が起こった際、大津波はハザードであり、それ自体は人間社会と何らかの形でかわらない限り、災害とはならない。例えば、経済的な理由により、海の近くに町を作り、人々が住み始め、その町が津波により破壊されたという場合、この被害を出した津波は、災害と呼ばれる。ワイズナーらは、災害について論じる際、このように、社会や文化とハザードの間に注目した (Wisner et al. 1994)。

これとの関連でしばしば注目されるのが、「脆弱性」の概念である。脆弱性とは、ハザードが与える衝撃あるいはインパクトに対し、どの程度対応できるのか、またそこから回復できるのか、あるいは、できないのかということを示す概念である。ハザードの衝撃を受けると予測される社会やコミュニティの状況や特定の文化的、社会的な要素が、脆弱かどうか、あるいは、どの程度脆弱なのかといったことに影響す

る (Wisner et al. 1994 : 11-16)。

災害が直接的、間接的に被災社会に様々な問題をもたらす時、その問題は、被災後初めて生じた問題ではなく、被災社会に被災以前からあった問題であるという場合が多々ある。災害により引き起こされる社会的問題は、もともと当該社会にあったものの、災害を経て注目され始めたのである (Oliver-Smith 2001 : 25, 26)。

一方、ハザードがもたらす破壊からの回復に関しても、社会的、文化的要素が有効に働くことがある。回復力、あるいは、レジリエンスは、災害時及び災害後の被災社会の、状況への対処能力を示す言葉である。ハザードが作り出した危機的な状況に対して、被災社会はその文化や社会関係資本を以て弾力的に対処し、ハザードによる破壊から回復していくのである (Aldrich 2012 : 5-7)。

「危機と文化継承」というテーマで行われる本シンポジウムでは、災害を含めた危機的な状況において、文化が如何に柔軟にそれに対応してきたのか、また、文化や社会組織による問題で、危機が作りだされたのか論じられた。これらの発表では、人間がエージェントとして主体的に文化に関わることにより、如何に危機的な状況に対応できるのかということを示してもいる。

参考文献

- Aldrich, Daniel P. 2012 *Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery*. London: University of Chicago Press.
- Oliver-Smith, Anthony
2001 *Theorizing Disasters: Nature, Power, and Culture*. In *Catastrophe and Culture*. M.S. Hoffman and A. Oliver-Smith eds. Santa Fe: School of American Research Press. pp.23-47.
- Wisner, Ben, Piers Blaikie, Terry Cannon, and Ian Davis
1994 *At Risk: Natural Hazards, People's Vulnerability and Disasters*. Second Edition. New York: Routledge.

1. シンポジウム趣旨説明 (桑野萌)

本シンポジウムのテーマである「危機と文化継承」とは、本プロジェクト研究代表の齋藤が述べているように人口減少、自然災害、戦禍などの危機的状況においてどのように先人たちの築いてきた信仰や文化を継承していくことができるのか、という問いを示している。近年においては、新型コロナウイルス感染症パンデミック、テロ、戦争などさまざまな大規模災害により、大切にこれまで築き上げてきた慣習、価値観、信仰などが根底から覆されるような危機に直面している。例えば、宗教の危機という視点で述べれば、近年のコロナ感染症パンデミックの影響において従来の宗教儀礼の在り方は変容を余儀なくされ、今その本来の意味や価値観について改めて問われている。本シンポジウムではこうした状況の中で危機に向き合い、文化と信仰の継承の問題について4名のシンポジストの報告を通して考えた。

宗教哲学・民俗学を専門とする鎌田東二氏は、危機を救う方策としての祭りや歌の伝承文化について、人類が紡いできた神話からどのように危機を克服したのかを明らかにし、人類生存の道を探った。写真家で石のかたりべとして活躍する須田郡司氏は、民族や国、諸文化を超えた「巨石信仰」について、巨石信仰との出会い、東北の巨石信仰と東日本大震災そして北陸における巨石信仰についてご自身の体験に基づいて明らかにした。またキリシタン史、キリスト教実践神学をご専門とする奈良献児氏は、加賀藩内のキリシタン信仰の継承について高山右近の実践とそれによって築かれた文化を軸にお話いただいた。そして、文化人類学を専門とする小西賢吾氏は宗教実践の立場から人と人をつなぐ祭縁について明らかにし、将来につながる共同体存続のための在り方について探った。

本シンポジウムは災禍における信仰と文化の継承について多角的な視座から議論することを通して、現代における危機をどう乗り越えてい

けるのか、また人類共同体や地球全体の未来をどのように考えていくことができるのかを総合的な視座から考えていく契機となった。

2. 「危機と文化継承～危機を救う方策としての祭りや歌の伝承文化～スサノヲが問いかけたもの (鎌田東二)

いろいろな時代にいろいろな「危機」があった。「危機」のなかった時代はない。だが、今日現在の危機は構造的に深刻である。現代の危機として、①環境危機～自然災害の多発・激甚化、②食料・エネルギー的危機～気象異常による作物の不作・輸出入制限と飢餓の拡大、③経済危機～コロナパンデミック、ウクライナ侵攻による不安定化、④政治危機～ウクライナ戦争や各地の紛争と対立と分断、⑤文化危機～アーティストの困窮、芸術施設の運営の困難、助成金の目減り、⑥教育危機～いじめ・いきがい・いごち、自己肯定感の不足、⑧家庭危機～孤独・孤立・分離・分裂・無関心・虐待・家庭内暴力、⑨健康危機～コロナ禍により十分なアウトドア活動や交流ができないことによる健康不安と抑鬱などをすぐさま列挙することができる。

現在、気候変動がもたらす自然災害の多発と激甚化は凄まじい破壊力で人類の文明生活を脅かしている。また人類相互の戦争や紛争はさらなる格差や貧困や資源争奪や搾取を生み出しており、豊かな社会の創造とは遠く離れつつある。

その根っこには、ヒトとしての人類の生態の異常がある。そもそも生態系は食連鎖によって保たれているが、この食の闘争、すなわち食うか食われるかという食べ合いのバランスから逸脱したのが人間である。人間は食連鎖を無視し、食べ尽くすまでに食の独占を続け、食連鎖につながらない殺戮を繰り返している。そしてその果てに、結果的に戦争による自分殺しといのち殺害を進めた。核戦争はその最たる「激

食」である。この「絶体絶命」的な破壊的事態を打開する万能的方策はない。

しかし、そのような「大危機」のさ中、人類が紡いできた神話から危機脱却の物語を紐解き、人類生存のありようを根っここのところから練り直していくことも無駄ではないだろう。そこで、神話に籠められた人類叡智の賜物から聴こえてくるメッセージを読み解いてみたい。

多くの世界神話は死と再生を物語る。その一つのパターンが、巨大な怪物による破壊や闘いとそこからの打開と脱却である。そのことを踏まえて、わたしは『絶体絶命』（第四詩集、土曜美術社出版販売、2022年5月30日刊；サードアルバム、2022年7月17日リリース）と題する詩集と歌を出したが、実はその詩集と歌は『古事記』（712年編纂）上巻に描かれた須佐之男命と大国主神の開いた道である。現状の構造的危機を、日本神話における八頭八尾のモンスター・八岐大蛇と見立てて、それと闘い退治した上に、その尾から「三種の神器」の一つとなる草薙剣を取り出し、わが国最初の歌を詠ったスサノヲの事績を紐解くことで、「危機を救う方策としての祭り」と歌の伝承文化」について考えてみる。

論点は次の5点である。

- 1、「危機と文化継承」を日本神話から考えてみる
- 2、『古事記』に描かれた2つの危機打開の生存戦略
- 3、『古今和歌集』紀貫之「仮名序」におけるスサノヲ・ルネサンス
- 4、「天下の御祈祷」としての能の戦略
- 5、「祭りのある町には明日がある」
- 6、歌舞音曲の力～身近な事例から

『古事記』には2つの危機打開の生存戦略が描かれている。1つは、天の岩戸開きの物語として、また2つめは八岐大蛇退治の物語として。前者においては「祭り」、後者にあつては「詠歌（歌を歌うこと）」が解決策や事後始末と

して記されている。これは『古事記』の生存哲学であり、逆境突破の「開かれ」の語りであり、最大の危機を脱した生存哲学と生存事例の提示である。祭りをすること、それは死と再生の希求劇である。そこで、日の神アマテラスは象徴的に一度死んで甦り、再生する。その甦り・再生策を、中臣藤原氏の祖先のアメノコヤネが祝詞奏上し、忌部氏の祖先のアメノフトダマがみてぐら（幣帛）を捧げ、猿女氏の祖先のアメノウズメが神憑りして踊りをおどることで成就したと『古事記』は描く。そしてそれが大成功を修め、その後日本ではさまざまな危機の時に祭りを行なうことで各種危機を切り抜けようとしてきたというのが、日本における祭りの起源と文化伝承である。

「祈り」は1人1人の個人でできるが、「祭り」は1人では行なえない。多くの人々の協力が必要になる。まさに協力・協働・共同・共働の作業が「祭り」であり、これにより生きる力の共同・協働性が生まれてくる。祭りという「集い」と「助け合い・支え合い」、すなわち危機打開のための相互扶助行為の文化継承こそが祭りなのである。

もう1つの生存戦略の「詠歌」は、八岐大蛇退治をしてスサノヲが歌ったワザの文化継承である。神話によれば、神々や人間の心にはさまざまな「負の感情」が堆積する。それを見つめ、付き合い、ケアし、開放するワザこそが詠う（歌う・謡う）ことである。この歌による相互ケアとセルフケアの両面成就において、人類はさまざまな形の「なりわい（生業）」の中で生まれてくる「わざわい（災禍）」を超えて、「さちわい（幸福）」求める方策を編み出してきた。その伝承の中から新たな活路を拓くメッセージをこれからも読み取り、汲み取り、活かしていきたい。

3. 「石の聖地～東北・石川・出雲の巨石信仰」 (須田群司)

3.1. 石の聖地とは

私は日本各地, 世界各国の聖なる石・巨石をテーマに撮影をつづけています。

聖なる石・巨石とは古事記や日本書紀などに出てくるいわくら磐座・いわくら石座や石神, 岩神などと呼ばれ信仰の対象になっている場所です。古来, 日本では神が降臨する石・巨石・山・樹木・湧き水などあらゆる森羅万象のモノに神が宿るという自然信仰(アニミズム)的な世界観がありました。学生時代, 沖縄で地理学を学んだことをきっかけに, うたき御嶽信仰, 拝所空間に魅かれるようになったのです。御嶽は基本, 杜の中にあり, そこには石灰岩の石(イビ)などがある祈りの場所です。

3.2. 巨石信仰との出会い

私が, 最初に巨石信仰と出会ったのは今から30年位前になりますが, 和歌山県新宮市にある神倉神社のゴトビキ岩との出会いです。ゴトビキとは地元の方言でヒキガエルの意味です。この岩は, 熊野権現が最初に降臨した岩とされ熊野信仰の元となっています。毎年, 2月6日にはお燈祭りという火祭りが執り行われる場所としても知られています。1987年10月, 母が病で亡くなったことをきっかけに, 自分自信が「どこからきて, どこへ行くのか?」という問いが生まれました。その時, 実家に私自身が実際に生まれた部屋で, セルフポートレイトを撮ったのです。

やがて, 自信の内観的な旅のように故郷の山の岩場であったり山岳信仰の霊場, 沖縄の御嶽に身を置いて撮影をしました。自然の中でセルフポートレイトを撮影する行為は, 自然との交流, 大地との交わりによっておおいなる自然に生かされているという自覚をもたらしたのです。日本語には様々な同音擬語があります。例えば, 石(いし)は, 意志であり医師でもあります。石の存在は, どこか医師的な癒しの力が

あるように思えるのです。

その後, 聖なる石・巨石信仰をテーマに国内外の「石の聖地」への撮影の旅を行うようになりました。

3.3. 東北の巨石信仰

2011年3月11日, 東日本大震災が発生しました。震災発生から2ヶ月ほど経った頃, 宗教哲学者の鎌田東二さんから電話をいただき, 宮城県から東北被災地の海岸線を北上する5日間の旅をしたのです。知人の車を借り寝袋で車上に泊まりながらの旅でした。津波被害の光景は忘れる事はできません。どこか戦争の後の光景を想像させました。石巻市雄勝町の仮設の役場を訪ねた時, 雄勝法印神楽保存会副会長の伊藤博夫さんと出会い, 法院神楽の冊子を拝見した際, 最初に磐座の写真がありました。私たちは, 翌朝, 石峰山の山頂近くに鎮座する延喜式内社でもあるその石神社をお参りすることができました。それから10年近く, 私達は特に海岸線沿いを中心に被災地域の定点観測を行ったのです。昨年2021年の11月の旅は, 海岸線に造られた防潮堤の存在に驚きました。10mから15mもの防潮堤の姿は, 震災後の象徴的な光景です。

3.4. 石川・北陸の巨石信仰

5月の連休に金沢市にあるギャラリー椋で須田群司・鎌田東二写真「東日本大震災から十年の記録と巨石文化」という展覧会を行いました。初日のトークイベントを終えてから, 鎌田さんと北陸縄文巨石巡礼の旅に出かけました。今回, その時の北陸の巨石信仰を紹介します。

最初に訪れたのは, 大矢谷白山神社と巨岩(福井県勝山市)です。ここは山岳修験の霊場としての雰囲気があり, 巨石群に圧倒されます。その後, 大岩大権現(福井県敦賀市)は, かつて江戸時代の末期, 水害の際, この巨岩が水の流れを変えて村を救ったとの伝承があります。久須夜神社の大神岩(福井県小浜市)は存

在感がありました。

石川県の宮村岩部神社（石川県加賀市）は、かつてたくさんの賑わいがあった神社ですが、いまはひっそりと佇んでいました。拝殿の後ろの六角堂の中にご神体の石が鎮座しています。その後、能登半島へ向かい、巨大な夫婦岩である機具岩（石川県志賀町）、高瀬宮（石川県志賀町）、石仏山の磐座（石川県能登町）、大境洞窟住居跡（富山県氷見市）の洞窟遺跡などを巡りました。富山湾を望む真脇遺跡を見ていると、この湾は良好な港として縄文時代から生活しやすい環境だった事が窺い知れる。出雲に呼ばれて2013年秋、私はご縁をいただき出雲大社より徒歩5分の古民家を購入して移住しました。

それから、出雲地方の石神さん、磐座、石神、岩神、洞窟などを精力的に巡るようになりました。地元では、巨石を実際に自分自信で巡れるような巨石マップを制作し、出雲の石の聖地の魅力を発信してゆきたいと思っています。

4. 「加賀藩内のキリシタン信仰の継承について」(奈良献児)

1588年から1614年までの間、この加賀の地にもキリシタンがいた。最初は高山右近の家族だけであったのだが、高山右近の働きを通して加賀藩には1500人を超えるキリシタンが誕生していった。今から470年前から400年前に生きたキリシタンたちにとっては、その人生の目的は、第二の人生であるパライス、つまり天国での生活こそが現世の生活よりも重要だと考えていた。その場所に行くために、では日々何をしていればよいのかということに教会は指導してきたのである。1614年までの加賀でのキリシタンへの信仰の継承は、次のような信仰の訓練が施されていた。どのようなことが実際に行われていたのかということを見ると、主には3つの姿がある。1つは文章、テキストによる教育、2つ目は能楽による典礼劇を通しての

教育、3つ目は茶道による教育である。

4.1. 1614年までの信仰継承

1) 文章による継承

では、その第1の手段である文章による教育とはどのようなものであったのか。以前日本で布教をしていたヴァリニャーノと言う宣教師が、天正遣欧少年使節を引率して再来日の時に、活版印刷機を持ってきた。そこで長崎の教会は、それを使用して色々な印刷物を刷り上げ、なかでもルイス・フロイスが持ってきたテキストを写本して20年ほど受け継がれていた「どちりいなきりしたん」を印刷して日本の各教会に送られ、キリシタンの指導のために使用された。「どちりいなきりしたん」については、後日、高山右近記念資料館で読書会をする予定。このテキストは、ローマカトリック教会の教えを問答形式で、初めてキリスト教に接する日本人のために改定されて出版された。

この原型は、宗教改革時代にプロテスタント教会が問答形式でプロテスタント教会の教えを分からせるために作られたものであるが、それをカトリック教会も流用して用いていた。高山右近の時代には、この印刷された「どちりいなきりしたん」を使用していたのであるが、高山右近自身は印刷本を持っていなかったので、手書きの写本を用いて信仰を教えられていた。

2) 文化による継承～能楽による典礼劇

そして、この金沢でのミサにおいて日本のその他の教会ではあまり見られない独自の信仰の継承をさせるために重要なことがあった。それが、能の舞を通しての聖書の物語を伝えるということである。金沢には歴史的事象を記録した第一資料としての「金沢古蹟史」、「三壺問書」、「加能越金砂子」などに、高山右近の舞について「能を見るなら高山右近、面かけずの十二郎」という文章が共通して登場している。しかも子供達でも囃子言葉として口に出しているとも表現されているのである。

「能」は武士のたしなみとして形成されて

いった芸術だが、それが市井の者たちの口に乗っているということは、頻繁に多くの人たちが高山右近の舞を見ているということとなる。どこで見ていたのかとなると、教会ないしはミサの場所で見えていたことでなければこのような囃子言葉は誕生しない。

では、どうしてミサにおいて舞を舞ったのであろうか。それは高山右近自身が能の名手であるということ以前に、教会で聖書を持たない者たちをいかに教化していくのかということで、中世ヨーロッパではルネサンス時代まで「典礼劇」を上演していたという事実を参考にしたのだと考えられる。

中世からルネサンス時代直前までのヨーロッパのキリスト教会に集まる多くの人たちは、文字が読めないので本を持たない、本を買えない貧しい人たちがであった。これらの者たちに聖書の教えている内容を理解させねばならないため、聖書の教えを、劇を通して教えていた。そのことを知っているヨーロッパから渡ってきた宣教師たちが、やはり日本の教会の中でキリスト教の内容を知らせるために用いたということは十分に考えられる。

実際、最初に「典礼劇」が演じられたことが記録されているのは1563年に大分県の教会であった。そのほか、京都、堺方面の教会でも演じられたということが宣教師のレポートからも明らかになっている。重要なのは、その「典礼劇」は金沢においては能の舞の形で行われていた可能性を否定できないということである。

更に重要なことは、当時、武家の文化の中には「一を知って十を知る」という考えが存在していたということだ。これは論語の中から採られた物の考え方であるが、物事の一端を知って全体を理解するという意味を持っている。これは物事を「察する」文化であるとも言われているのだが、このような思考の仕方が能に向けられると、能の演目の中に隠されているであろう聖書の教えを日本人の心情として察するという

方向に流れていくことがあったからこそ、能楽を以て聖書の教えを伝えようとした工夫があったのだと考えられる。

「隠喩論」そのものは古代ギリシャのアリストテレスの学術書である「詩学」あるいは「弁術論」に基づく「メタファー」に端を発するもので、今日まで一つの形ある定式は結論を視てはいない。ただ、この言葉は、一つの意味ではなく複数の意味を同時に持ち合わせている、と言うのが言語学的に理解する意味合いである。となれば、能の演目の中にもう一つの意味が隠されていて、その隠されている意味を理解する思考体形が「察する」という用語でくくられるのではと考えられる。それゆえに、「武士のたしなみ」だとされている能を舞う経験をしている者たちには、この能を用いての典礼劇こそ最も性に合っていることだと考えられるのである。

3) 茶の湯を通して信仰を伝える

フランシスコ・ザビエルが来日した後、彼の後を継いだ宣教師たちはイエズス会が世界的に「適応主義」を日本に当てはめた時に、日本で盛んに嗜まれていた「茶の湯」を教会の中でも実施するようにした。高山右近は利休の茶の湯の弟子の中で後に七人いる高弟の中で、利休より最も評価された人物であった。茶の湯において狭い茶室での個人的な会話からキリスト教の教えが問答されていたかもしれない。

また、茶室に入る庭には通称「織部式キリシタン灯籠」と呼ばれる変わった灯籠がおかれることが多かったようだ。今日、金沢だけでも10基の灯籠を数えることが出来る。気になるのはこの織部式灯籠の竿の上部にある謎の記号は長年意味不明となっていました。少なくとも織部もキリシタンとかかわりが深いという立場にあったことを考えると、織部灯籠の竿の記号は単なる刻みなのではなく、キリシタンと関係づけた可能性も捨てきれない。そう考えると、この記号を文字としてとらえるなら

「F」, 「J」, 「P」とみることが出来る。この織部が生きていた世界の公用語はラテン語であると考え、とすると、「F」, 「J」, 「P」とは、「Fili Jesu Patris」と読み取れる。つまり「イエスは父なる神の子」だという意味となる。そう記号を解釈するならば、キリシタンの信仰を流用した灯籠だとみても悪くはない。

面白い共通点は、この灯籠は「茶の湯」とかわる庭先に設置されているということだ。かつて高山右近の茶の湯での茶室は神と交わる聖堂であったと、上智大学の教授であったフーベルト・チースリク氏が指摘している。とするならば、神と交わる茶室の入り口近くに「イエスは神の子」と刻まれた灯籠があるということは、もしかしたら信仰継承のツールとしてあったのかもしれない。

4.2. 高山右近追放後の信仰継承

金沢のキリシタンとなった者たちが右近追放後に、蜘蛛の子を散らすごとくに棄教し、宗門改めの目に触れないようにしていたが、中には信仰を守り抜いた者たちや心の中では信仰を守ろうとした者たちが少なからず存在していた。彼らの信仰を守るため、教会は壊され、信仰的指導者もいない時期、どうやって信仰を守ろうとすることが出来たのであろうか。

高山右近が金沢で働いていた時、記録では能登地方にも教会が2か所あった。能登の教会の2か所の教会の所在地は、1647年ごろに出されたイエズス会のガルディム神父が作成した日本地図から判断するならば、七尾と志賀町であることが判明できる。実際、七尾市には「本行寺」というお寺があるが、このお寺の境内にはかつて高山右近が築いた修道所があったという伝説と、キリシタンに関する遺物が残っているという点からも、かつてここに教会があったという話が濃厚である。

また、志賀町は高山右近の長男の子供が金沢を追放され、右近がマニラで亡くなった後に秘かに入国して生きてきた場所であった。そこに

はもともと、キリシタンたちのネットワークがあったので、マニラから日本に戻ってきた後にこの場所に出かけていく理由がある。

能登のキリシタンたちが農民となって生きている間、人々が信仰を守り続けていった証拠は、キリシタンの遺物の中に見出される。加賀藩人持ち組の家柄の一つに「津田玄蕃家」がある。津田玄蕃の人の正室は元能登管領を継いでいた畠山家の子孫であった。津田家に嫁いだとはいえ、畠山家のアイデンティティーを失っていた彼女にとって心のよりどころとなったのは、キリシタンが教えるパラソ、すなわち天の国へのあこがれであったことは容易に想像つく。右近追放後、彼女は本行寺に永世蟄居となり、彼女の死後に作られた墓には、明確なキリシタンの証を刻んだものとなっている。

その他に、自らの内心の信仰を守るため、元キリシタンたちはいくつかの信仰を継承するための知恵がめぐらされた事物が証拠として現在も残されている。例えば、菅原道真であるとしているので、その立像、座像を各家に祭り奉賛してきた。その道真公の像にかぶせている烏帽子の裏に十字を刻んでいるものがある。能登のある家から寄進されたという地蔵の裏には十字架が刻まれたものがある。

また金沢の郷土料理の一つである治部煮も然り。他にも、金沢の兼六園の脇に「西田家庭園『玉泉園』」という庭園がある。今日、「西田家」が管理する庭園ではあるが、この庭園は、もともとは脇田直賢という豪姫付きの人物の庭であった。彼は、元は朝鮮の貴族の子であったが、豪姫の夫であった宇喜多秀家が日本に連れてきて養っていた。そして豪姫と一緒にキリシタンとなり、金沢にやってきている。この庭園には「織部式キリシタン灯籠」があるのだが、それ以上にキリシタンの目をもって庭園を見るならば、庭の一番上部から、兼六園より引水した水が庭に流れてきて、池に注がれる。この池は「水」という文字を描いている。ここに先

ほどの隠喩論を重ねていくと、高いところから流れてくる水は、水と言う字を模した池に注がれるということは、キリストが語った「生ける水」ということを象徴していると見る事が出来る。

以上のことから、能の舞から隠れた意味を察することにおいても、茶の湯からその精神性とそこから来る隠れた意味を察するということから、キリシタンたちが大切にしてきたことは、自分たちの生き方のゴールとは何か、ということを確認にさせていくということが重要だということの意味している。パラソでの生活に憧れる者たちは、自分たちの信仰を守ったことによりいつか自分もパラソに参ること、そこにキリシタンの信仰を継承させていくエネルギーが包括されているのだと言える。それは今日、危機の中を迎えている我々にとっても同じである。自分の生き方とその目指すゴールをしっかりと見据えていくことが大切なのだということではないだろうか。

5. 「人口減少とつながりのゆくえ—祭縁から考える—」(小西賢吾)

小西は集団的な宗教実践である祭りをコミュニティとの関連からとりあげ、人口減少社会におけるつながりのゆくえについて人類学的な観点から議論を行った。祭りが持つ儀礼としての側面と、祝祭としての側面の双方に着目し、その特徴を概観した上で、日本やアジアの諸地域において「つながり」を示すことばとして用いられる「縁」に注目し、祭りにおいていかなる縁が形成され継承されるのかを考察した。

まず、祭りとはいかなる経験なのかを考えるために、発表者が2018年に映像人類学者のJohn Wells氏に協力して作成した民族誌映画の素材をとりあげた。これは、発表者が石川県穴水町の「沖波大漁祭り」においてウェアラブルカメラのgoproを着用してキリコを担ぎ、海中に入っていく様子を捉えたものである。ここか

ら、祭りが身体を介した集団的な実践であり、祭りにおけるつながりが身体感覚のレベルを射程に含むことが示唆された。

続いて、祭りの儀礼としての側面を、人類学の古典的な議論を参照しつつ概観した。儀礼的側面は、厳粛さや信仰とのかかわる部分であり、とくに祭りの中核に位置づけられる神社での神事においては、生活空間を浄化し、繁栄を祈願する側面が強調される。これは、日本に限らず、発表者が調査をおこなったチベット(中国四川省松潘県)の祭りにおいても観察されるものである。この要素は、祭りが危機的な状況におかれた場合であっても、その目的ゆえになおさら存続が指向される。ここでは、七尾市の青柏祭をはじめとして、コロナ禍において祭りが簡略化される中、神事のみが実施されてきた事例を検討した。

儀礼としての側面は、祭りの「意味」や「意義」に関わる部分である。その一方で、こうした意味を越えて、祭りに身心を揺さぶられる場面が存在する。それを捉えるために、祭りの祝祭としての側面を検討した。祝祭は、にぎわいや蕩尽といった概念と連関し、その場に身体がともにあることによって生み出されるものを射程とする。

都市化や産業構造の変化、少子高齢化、過疎化などによって、従来の地縁に根ざしたコミュニティが希薄化する一方で、祭りは時空間をこえた多様なつながり(=祭縁)によって維持されるようになってきている。ここでは、発表者がかつて調査をおこなった秋田県角館の祭りを事例にして、非日常空間における偶然性をはらんだ祭りの展開や、そこで生み出されるストーリーの共有が、多様な人びとをつないでいくことを論じた。

その一方で、特に人口減少やコロナ禍は、祝祭の中核をなす「多様な人びとが集い協働する」という実践を困難なものにしてきた。とくに、過疎化が進む地域において危機に瀕してい

る祭りを存続できるかどうかは、「縁もゆかりもなかった」人びとをどのように巻きこんでいけるかにかかっている。これは、近年地域活性化の文脈で注目される「関係人口」の概念とも響き合うものである。祭りという非日常の空間は、既存のつながりの境界がゆらぎ、開いていく場ともとらえることができる。そこで、地縁や血縁に根ざしたコミュニティを越えたつながりが発生する契機をみることができる。本発表

では、それを身体に根ざした経験や、不確定性を織り込んだストーリーの共有からとらえることを試みてきた。こうした議論は、祭りの存続という文脈にとどまらず、文化的背景が異なる人びとが「ともに動いていく」ようなつながりのあり方を示唆している。それは、多様な危機を乗り越えてより豊かな生のあり方を模索する試みの一端に位置づけられるものである。